

## 保育所で発熱した乳幼児の保護者との対応の際の保育士の困難

The difficulties nursery teachers experience when interacting with guardians of infants who develop a fever at nursery school

小代 仁美 Hitomi Ojira

奈良県立医科大学 医学部看護学科 小児看護学領域 Nara Medical University

高野 政子 Masako Takano

大分県立看護科学大学 専門看護学講座 小児看護学 Oita University of Nursing and Health Sciences

山内 美奈子 Minako Yamauchi

大阪発達総合療育センター Osaka Developmental Rehabilitation Center

2014年4月7日投稿, 2014年9月11日受理

### 要旨

本研究は、保育所で乳幼児が発熱した時に、保育士が保護者との対応においてどのような困難さを感じているかを明らかにすることを目的とした。A県内の2市にある認可保育所99施設から無作為に抽出した20施設のうち保育所施設長の承諾が得られた15施設の保育士314名を対象とし、保育士が発熱のある子どもとその保護者に対する支援の実態について質問紙調査を行った。本研究では、そのうち保護者との対応にあたって困難を感じた点について回答の得られた119名の自由記述の内容を質的に分析した。その結果、[保護者の態度への困難]、[保護者が仕事を優先する状況への困難]、[発熱児の体温管理への指導や対応への困難]の3カテゴリーが抽出された。保育士は保護者との対応で、自分の子どもが発熱した時には、まず保護者が自分の都合を優先させる態度や、感染の流行を予防するという集団保育における健康管理の重要性を保護者に指導する難しさなどの困難があった。

### Abstract

The objective of this study was to clarify the difficulties nursery teachers face in responding to guardians of children who develop fevers at nursery school. From among 99 certified nursery schools in two cities in Prefecture A, we randomly selected 20 facilities, 15 of whose directors provided consent. The 314 participants were nursery teachers employed at these schools. We administered a questionnaire asking nursery teachers about their support of children who develop fevers and their interactions with guardians. Then, we qualitatively analyzed the free-response content from 119 nursery teachers regarding the difficulties they experienced in responding to guardians. Based on this analysis, we extracted the following three categories: "difficulty with guardians' attitudes," "difficulty with situations in which guardians prioritize their work," and "difficulty in instructing and responding to guardians in regards to the body temperature management of children with fevers." Our results indicated that nursery teachers experienced the most problematic interactions with guardians who prioritized their own convenience over the needs of the children and the nursery teachers, and they also experienced great difficulty in instructing guardians about the importance of body temperature management in order to prevent the spread of infection in group child care.

### キーワード

子ども、発熱、保護者、保育士

### Key words

child, fever, guardian, nursery teacher

### 1. はじめに

保育所に通う乳幼児期の子どもは、母親から受け継いだ免疫が薄れていく時期であり、発達に伴い行動範囲が広がり、さまざまな感染症にかかりやすい時期である。加えて、保育所は多数の乳幼児が集団生活する場であることから、集団感染の危険性も考えられる。保育所における感染症の登

園基準は、「2012年改訂版保育園における感染症対策ガイドライン」により規定されている(和田2011)。しかし、これは起炎菌が判明している場合の基準であり、起炎菌が特定されない感染症での登園基準は、現場の判断に委ねられている(五十嵐他2013)。

保育所において、保育中に発生する体調不良の

主な症状の中で、発熱が年間を通して最も多い(藤城 2011)。子どもが発熱した時、保護者は仕事を休んだり、早退したりしなければならない。一方、保育士は集団の中に発熱している子どもがいることで、他の子どもへの影響や発熱した子どもの病状の心配をしている(奥山 他 1996)。保育所は、子どもにとっても保護者にとっても生活の中核的存在といえる重要な位置を占めるが、保護者の利便性のみを追求して整備されつつある(五十嵐 2008)。子どもの幸せを第一に考えるという視点に立ち、保育所で発熱した子どもの看護をどのように行うべきか、保育所における感染症対策を検討していく必要がある。

そこで、発熱のある子どもとその保護者に対する保育士の支援の実態について質問紙調査を行った。本研究では、保護者との対応にあたって保育士が困難を感じた点に着目して回答の得られた自由記述の内容を質的に分析し、その要因を明らかにすることとした。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査期間及び調査対象者

調査は2011年8～9月に実施した。調査対象者は、A県内の2市にある認可保育所から無作為に抽出し、保育所施設長の承諾が得られた15施設の保育士314名である。認可保育所における1施設当たりの保育士数は、15名～24名であった。

### 2.2 調査手順と方法

調査は無記名の自記式質問紙調査を行い、保護者との対応での困難について自由記述にて求めた。質問内容は、「発熱のある子どもの保護者との対応で困ったことは何ですか」とした。質問紙調査は、2週間の留め置き法で実施した。

調査の手順は、まず認可保育所20施設に文書を持参し、施設長に文書及び口頭にて調査への協力を依頼した。研究協力を承諾が得られた15施設長に保育士への質問紙の配布及び保育所に回収封筒の設置を依頼した。質問紙の回収は、研究者が保育所に直接出向き回収した。

### 2.3 分析方法

自由記述から発熱した子どもの保護者との対応の際の保育士の困難が書かれているコードを作成した。コードの意味内容の類似性に着目して分類

し、カテゴリ化した。分析は、共同研究者間で繰り返し検討し、信頼性の確保に努めた。

## 3. 倫理的配慮

対象施設の施設長及び対象者に対して、研究への参加は自由意思であること、参加の有無で不利益を受けないこと、質問紙は無記名でお願いするため対象が特定されないこと、施設の特定をしないため施設間の比較は行わないこと、質問紙の回答をもって対象者が本研究に同意したとみなすこと、回収した質問紙は厳重に保管すること、結果は目的以外には使用しないこと、研究終了後は調査用紙及びデータを速やかに破棄すること、本研究の結果を学会等に公表する予定であることを文書で説明した。本研究は、大分県立看護科学大学研究倫理安全委員会の承認を得て実施した(承認番号591)。

## 4. 結果

### 4.1 対象者の属性

配布数314部、回収数253部、有効回答200部(有効回答率79.0%)で、そのうち保護者との対応にあたって困難を感じた点について回答の得られた119部の自由記述の内容を分析した。本研究における対象者の属性は、平均年齢37.0(Range 22～70)歳、勤務年数平均11.9(Range 1～39)年であった(表1)。

表1. 対象者の属性

		(n=119)	
		n	%
年齢	20-29歳	45	37.8
	30-39歳	30	25.2
	40-49歳	24	20.2
	50歳以上	20	16.8
経験	5年未満	23	19.3
	5-10年	40	33.6
	11-15年	24	20.2
	16-20年	15	12.6
	21年以上	17	14.3
医療機関勤務経験	あり	8	6.7
	なし	109	91.6
	不明	2	1.7
クラス担任	担任である	93	78.2
	担任ではない	25	21.0
	不明	1	0.8

#### 4.2 発熱のある乳幼児期の子どもとの保護者との対応の際の保育士の困難

188件の記述があり、3カテゴリ、9サブカテゴリが抽出された(表2)。以下、カテゴリを[ ]、サブカテゴリを 、コードを で表す。

##### 4.2.1 [保護者の態度への困難]

子どもが発熱した際の連絡時に、保護者の言葉や態度から受ける保育士の困難を表している。保育所での子どもが発熱に際して、保育士は保護者へ連絡をするが、緊急時の連絡がつかないことがあったり、連絡が取れてもお迎えに行き、連れて帰ると熱が下がる 熱の測り方を疑われる 子どもは平熱が高いのに、すぐ発熱の連絡がくると言われるなど、保育所の体温管理を疑うような 発熱の判断の難しさと苦情対応 に保育士は苦労していた。また、子どもを迎えにきた保護者の「ムツとし」「何なん」と子どもにぶつづつ

言う 態度に保育士は困惑していた。さらに、保護者は、感染症で登園させる など 小児感染症流行に対する認識の低さ があった。

##### 4.2.2 [保護者が仕事を優先する状況への困難]

子どもの健康管理への心配をしながらも仕事を休めない保護者の立場に理解を示すものの、子どもが犠牲になっている状況に対する保育士の困難を表している。

核家族で共働きをしている保護者は、子どもが保育所で発熱をしても、仕事の都合がつかず迎えに来ない> 仕事が抜けられない、休めない、中断できない と、発熱して連絡しても仕事を理由に迎えに来ない 状況であり、結局、何度も職場に電話をしなければいけなくなる と、保育士は困惑していた。また、38℃を超えても元気があるので少し様子をみて欲しい、発熱しているが、どうしても仕事に行かなくてはならな

表2. 発熱した乳幼児の保護者との対応の際の保育士の困難

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
保護者の態度への困惑 (88)	小児感染症流行に対する認識の低さ (47)	感染症で登園させる 感染症であるのに解熱後すぐ登園させる 熱があるが園に預けてもよいかきかれる
	発熱の判断の難しさと苦情対応 (37)	早退したが家に帰ってからは熱がなかった お迎えに行き、連れて帰ると熱が下がる 熱の測り方を疑われる 子どもは平熱が高いのに、すぐ発熱の連絡がくる 病院へ行った方がいいですか、お迎えに行った方がいいですかと聞く ムツとし「何なん」と子どもにぶつづつ言う
	緊急時の連絡がつかない (4)	39℃以上の熱がでて保護者と連絡がつかなかった お迎えの連絡がつかない
保護者が仕事を優先する状況への困惑 (77)	発熱して連絡しても仕事を理由に迎えに来ない (41)	仕事の都合がつかず迎えに来ない 仕事が抜けられない、休めない、中断できない 結局、何度も職場に電話をしなければいけなくなる
	発熱児の保育依頼 (34)	発熱しているが、どうしても仕事に行かなくてはならない しばらく園で見てもらえないか 38℃を超えても元気があるので少し様子をみて欲しい 預かってほしい
	発病した時の受診代行の要望 (2)	緊急を要する高熱時にはまず病院に連れて行って欲しい 小さなケガでも病院に連れて行かないと納得してくれない
発熱児の体調管理への指導や対応への困難 (23)	病気にに対する相談に回答できない (18)	病院に受診した方がいいですか 痙攣が起きたらどうしたらいいですか 40℃が何日も続くのはなぜですか、どうしたらいいですか どうして発熱が頻繁するのだろうか、何の病気ですか 発熱を伴う湿疹は何の病気ですか 薬を飲ませたほうがいいですか 園で流行している病気は何ですか 医師ではないので病院に行って欲しいと思うが、それが伝わらない けいれんを起こすことがあるため、坐薬をお願いしたい 熱性けいれんのある子どもの対処や坐薬のお願い
	病児への薬物使用の要望 (3)	病院に行くべきか、どうなったら登園してもよいかという 前日の夜熱があったが次の日に登園してもよいかという 38℃でも平熱が高い、元気だったら保育所に預けてもよいかという 発熱した時は保育所で見てもらえないかという 40℃以上の発熱で坐薬を使用し熱が下がったとこのことで登園をさせる 発熱や嘔吐をしても病院にかからない 熱があるまま、検温もしないで連れてくる 眠たいから、陽に当たったからと言い登園させる 発熱や嘔吐を繰り返すことを電話で伝えても重要と思ってくれない



い、預かってほしい など、保護者の 発熱児の保育依頼 に保育士は困惑していた。加えて、保護者の 緊急を要する高熱時には先ず病院に連れて行って欲しい と 発病した時の受診代行の要望 を受け入れざるを得ない状況に保育士は困難を感じていた。

#### 4. 2. 3[発熱児の体調管理への指導や対応への困難]

発熱した子どもや他の園児への影響などに対する保護者の危機感が低いことを表している。保育士は、眠たいから、陽に当たったからと言い登園させる 発熱や嘔吐を繰り返すことを電話で伝えても重要と思ってくれない 熱があるまま、検温もしないで連れてくる 保護者に対して 子どもの発熱を重要視する姿勢がみられない保護者に対して指導できない 辛さを感じていた。また、保育士は、保護者の 病院に受診した方がいいですか 40 が何日も続くのはなぜですか、どうしたらいいですか どうして発熱が頻繁するのだろうか、何の病気ですか 発熱を伴う湿疹は何の病気ですか 薬を飲ませたほうがいいですか 園で流行している病気は何ですか という病気に対する相談に回答できない 辛さと、保護者への対応の難しさを感じていた。また、けいれんを起こすことがあるため、坐薬をお願いしたい との保護者からの 病児への薬物使用の要望を受けざるを得ない状況もみられていた。

## 5. 考察

### 5. 1 発熱の乳幼児を通常の保育所で預かることの難しさ

子どもが病気の際に保護者は、勤務先に対して休暇を取らせて欲しい、勤務時間に融通をきかせて欲しい、という要望をもっているが、子どもの病気では職場を休みにくいという思いを抱いている(大木 2003)。共働きの世帯が増加したことで、保育所に通う子どもたちが増加してきたにもかかわらず、保護者の職場環境は改善されていない現状がある。また、保護者は、保育所に対して子どもが病気の際の保育をして欲しいということを強く思っている(大木 2003)。このような状況をよく理解している保育士は、子どもの体調が十分に回復してから登園して欲しいとは思っていても、実際には保護者からの要望を受け入れざるを得

ない状況があるのではないかと(五十嵐 他 2013)。しかし、保育所は多数の乳幼児が集団生活をする場である。また、保育所に通う子どもの低年齢化が進んでいる中で、感染力をもった病状の子どもが登園することで、保育所内での感染の拡大が予測され、体調不良の子どもを保育所で受け入れることは難しい(藤城 2013)。現在、共働きの保護者が安心して、社会の中で子育てができるために、病児保育の拡充が進められている。しかし、保護者は、通い慣れた保育所でいつもの保育士に看病を希望していることや保育料によっては病児保育を利用できない、という考えも抱いている(大木 2003)。保育料が高いなどの理由により、軽度の発熱等では、保護者は通常の保育所に預けていることが考えられる。本調査結果においても、子どもが発熱しても保育所に登園させる保護者がいることや、その保護者の対応や子どもの発熱の看護に保育士は困難を感じている、という事実が明らかとなった。このことから、軽度の病状であることや保育料が高いことなどから病児保育を利用しない子どもに対して、通常の保育所での受け入れについて検討が必要ではないかと考える。

### 5. 2 子どもの健康管理と保育所における看護職の役割

保護者は、日々の生活に追われ、子どもの体調管理まで十分にできていない状況が伺える。このような保護者への支援は、保育所のみでは限界があると考えられる。共働き家庭で、子どもが病気になった時、地域での支援などを考えていく必要がある。

また、子どもとの接触体験の少ない世代が保護者となり、子育てに不安を感じながら育児をしている保護者は少なくないと考えられる。子どもの発熱に対して保護者は、病院受診した方がいいのか、どこの病院を受診したらいいのか、何の病気かなど、子どもの病気の際にどうしたらよいか戸惑いを感じている。

保育所では、1969年厚生省児童家庭局長通達第204号「保育所における乳児対策の強化について」及び1977年厚生省児童家庭局長通知第268号「保育所における乳児保育特別対策について」により、乳児保育実施に伴って看護職が配置されるようになった。保育所における看護職の役割は、乳児保育のみならず保健活動や保護者への保健指導

など役割が拡大してきた(全国保育園保健師看護師連合会 2007)。しかし、看護職の保健活動の業務内容は明確にされていない現状があり、保育士と同じ業務を行っている看護職が多い(上別府 他 2010)。保育所に勤務する看護職が、保健活動に従事できるような保育所での役割調整が必要と考える。また、通常の保育所内で健康な子どもの保育と体調不良の子どもの看護ができる設備の拡充と体調不良の子どもの受診ができる医療機関との密な連携が必要と考える。さらに、保護者が子どもの健康管理について自信をもち、責任をもって行えるように、看護職が保護者に感染の流行予防に関する集団保育における管理の重要性について指導・教育していくことが必要である。一方、保育士へも子どもの健康管理に関する指導・教育していくことも必要と考える。

## 6. 結論

保育所で発熱した子どもの保護者との対応の際の保育士の困難は、[保護者の態度への困難][保護者が仕事を優先する状況への困難][発熱児の体温管理への指導や対応への困難]であった。

保育士は、保護者に保育所で自分の子どもが発熱した時は、まず保護者が責任を持って子どもの健康管理の対応をすることや、感染の流行を予防するという集団保育における健康管理の重要性を保護者に指導する困難や保護者への対応の困難を感じていた。

## 引用文献

藤城富美子(2011). 保育園における感染症流行の実態とその対策・子どもの病気対応と保護者の就労支援のために. 小児科 152(10), 1353-1361.

藤城富美子(2013). 保育園の子どもたちと職員を感染症から護るために・感染症の発生状況とワクチン接種率. 日本小児保健協会 72(2), 243-245.

五十嵐登, 新谷尚久, 押田喜博 他(2013). 集団保育時の疾患回復登園基準に関する小児科医・保育士・保護者間の認識の相違について. 外科小児科 16(1), 87-91.

五十嵐隆(2008). 保育環境の問題. 小児科診療 71(11), 1915-1918.

上別府圭子, 多屋馨子, 門倉文子 他(2010). 平成21年度保育園の環境整備に関する調査研究報告書・保育園の人的環境としての看護師等の配置. 社会福祉法人日本保育協会.

奥山朝子, 山本捷子, 大高恵美(1996). 保育園における健康管理上の問題と看護職導入への期待・秋田市の公立保育園の保母と保護者の意識調査. 日本赤十字秋田短期大学紀要 1, 57-67.

大木信子(2003). 保育園児の病気時の保育の実態と保護者の支援ニーズ. 小児保健研究 62(3), 350-358.

和田紀之(2011). 幼稚園・保育園における感染症対策. 小児感染免疫 23(1), 35-42.

全国保育園保健師看護師連合会(2007). 保育所保育指針の改訂にあたっての保育園看護職からの意見. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/08/dl/s0823-6g.pdf>



## 著者連絡先

〒634-8521  
奈良県橿原市四条町 840  
奈良県立医科大学 医学部看護学科  
小代 仁美  
ojiro@naramed-u.ac.jp